

「限界集落」を丸ごと旅館に イタリアの新しい空き家対策 観光客が増加、移住する人も

志子田 徹

北海道新聞ロンドン支局

人口減少と少子高齢化に歯止めがかからず、日本では「地方消滅」の危機が叫ばれている。同様の悩みはイタリアも抱えており、一九六〇年代に高度経済成長期を迎え、地方から大都市へと人口流出が続いている。一方で、何とか生き残りを図ろうと必死に模索する取り組みも多い。近年、イタリアで注目を集める限界集落の活性化策「アルベルゴ・デイフーズ」を紹介し、地域再生のあり方を考える。

人口は二〇分の一以下に

ルネサンス芸術の都で知られる世界的な観光地、フィレンツェから、車で東へ向かう。小高い山並みがつづき、曲がりくねった峠道を一時半ほど進むと、森の向こうの山肌に張り付いている集落が見えた。家の屋根や壁は濃い茶色。紅葉前の緑の美しい山中にあつては殺風景で、遠くからでも

ひと気がないことはすぐに分かる。道路脇には標識代わりの大きな石が置いてあり「ラッジオーロ」と書いてあった。目的地の「限界集落」である。ラッジオーロは、二つの集落が合併してできた「オリタニャオ・ラッジオーロ村」の一部である。ラッジオーロは林業を中心に営んできた集落で、かつてはヒツジの放牧者も季節的に移住してきた。また、近くの山から鉄と石炭が少し採掘も

きたので、中世からそれらを生かした刃物製造も行われていた。集落の人口は一九五〇年代までは二二〇〇人に上ったが、現在は二〇分の一にも満たない五〇人に激減している。暮らしているのはお年寄りばかりの、典型的な限界集落である。「まちから遠くて、昔は小麦さえ手に入りにくかったから、パンやお菓子はクリを粉にして作っていたんだ。秋になると周辺の集落からもたくさん手伝いに来てね、皆でワインを飲みながらイガを外して、粉をひいたんだ。にぎやかで楽しかつ

たな」。ラッジオーロで生まれ育ったジョルジーニ・オズバルドさん（八六歳）はクリを焼く手を休めて、昔の集落の様子を教えてくれた。祖父の代からの製材業を守り、今は息子が引き継いでいる。「でも、ここで林業やっていた連中はだいたい四〇年ぐらい前から、次々と都市の工場に出て行っちゃったね。どんどん寂しくなってきたけど、俺はこの森が好きだから残っているんだ」。

フィレンツェに住む税理士ルカ・ミノッキさん（三八歳）の父も、若い時に集落を離れた一人だった。ただ、休暇の度にミノッキさんを連れて遊びに来ていたので、ミノッキさんにとつてもラッジオーロは故郷だ。「集落の皆が仲良しで、穏やかに暮らせる。秋のクリも冬の雪も、何もかもが大好きなんだ」とミノッキさん。寂れる一方の故郷のために、何かできないかと考えていた時に、アルベルゴ・デイフーズを知った。

住民の暮らしを知る

アルベルゴ・デイフーズは直訳すれば「拡散したホテル」。つまり、集落を丸ごと旅館にする発想である。数百メートル以内で点在する空き家に、宿泊部屋とレセプション、食堂など、それぞれ別の役割を担わせる。経営者は一人でも複数でもできるし、空き家は購入せず賃貸でも経営は可能だ。食堂で提供する食事は地域の食材を使う「地産地消」。朝昼晩すべて提供するのが難しければ、朝

食だけ用意するようにして、昼夕食は地域の食堂や居酒屋を積極的に使ってもらおう。要するに無理をせず、できる範囲で取り組む旅館業である。

イタリアは欧州債務危機の影響で二〇一一年から経済危機に直面した。地方では過疎化に拍車がかかり、都市部への人口集中が加速している。このため地方で空き家が急増しており、現在は国内に二千万件とも四千万件とも言われている。こうした状況で、アルベルゴ・ディフーズは空き家を活用するため巨額の投資が不要な、新しいタイプの宿として注目が集まっている。今年一〇月現在、アルベルゴ・ディフーズ協会の認証を受けているのはイタリアに八四件で、開設準備中のところを含めれば、まもなく一〇〇件に達する。また、スペインやスイスなど他の欧州四カ国でも開設する準備が進んでおり、各国で急速に広がり始めた。アルベルゴ・ディフーズを発案したのは観光コンサルタントのジャンカルロ・ダッラーラさん（六三歳）で、現在は協会の会長を務めている。全国ホテル協会のマーケティング担当だったダッラーラさんは一九八二年、その六年前の地震で被害を受けたイタリア北部のフリウリ地方を、地域再生をテーマにした講演を行うため訪れた。「壊れた建物は新築されたり修復されて、外見上は新しいまちに生まれ変わっていた。ところが、肝心の住民は結局、都市へと移住する人が増え、空き家ばかりになっていったんだ。せつかくまちは新しくなったのに住民が住んでおらず、残っている人



限界集落を丸ごと旅館にする「アルベルゴ・ディフーズ」を発案した協会会長のジャンカルロ・ダッラーラさん。「空き家を有効活用しながら、宿泊客には住民の本当の暮らしを知ってもらいたい」（筆者撮影）

はほとんどがお年寄りになってしまった。これを何とかできないか、と考えたのがアルベルゴ・ディフーズのきっかけだった。

その後、イタリアのペルージャ大学で観光を講じながら構想を温め、九〇年代にイタリア・サルディーニヤ島で始めた試みが初めてのケースとなった。「寂れたまちを活性化する方法としては博物館などの公共施設、あるいは大型店などの誘致が手っ取り早い、博物館などは閉館時間後は

人がいなくなるし、大型店は騒々しくて住民が必ずしも歓迎するとは限らない」とダッラーラさん。アルベルゴ・ディフーズならこうした「弱点」がない、と主張する。

「最も大事なことは、宿泊客と住民がふれ合い、交流を深めること。そして集落の日常生活を知り、本当の住民の暮らしを知ってもらうことだ」。イタリアでも、都市住民は隣近所のつきあいがだんだん希薄になっているし、田舎に来てもホテルに泊まれば地元の人と交わることはない。アルベルゴ・ディフーズは地元住民と自然な形で交流でき、人間らしい関係がつけられるのが最大の魅力だという。

ダッラーラさんの考え方に共感したミノッキさんは二〇〇五年、ラッジョーロで六件の空き家を購入し、経営を始めた。「泊まる人はお客さんでなく友人としてもなしたい。そしてこの集落を気に入ってもらって、ほとんど人が訪れるようになってほしいんだ。そうでないと、本当に消滅してしまうからね」とミノッキさん。宿の名称はラッジョーロがフランス・コルシカ島の出身者が開いたという言い伝えがあることから、コルシカ人の村という意味の「ボルゴ・デ・コルシ」。集落の中心にある教会前の広場に面して食堂を、その近くにレセプションを作ったが、最も離れた部屋までは三〇〇メートル以上ある。せつかくの機会だから、その一番遠い部屋に泊まることにした。

穏やかな暮らしを求めて

車が通れない石畳の狭い路地は急な坂道だが、古い町並みには趣がある。周囲は山並みが広がり眺めも抜群だ。息を切らせて坂を上っていると、すれ違ったカルロ・リストーリさん（七一歳）が「うちからの眺めが素晴らしいんだ、寄って来なよ」と声をかけてきた。リストーリさんは奥さんの実家がラッジョーロにあることから、四〇年前に結



限界集落のラッジョーロ地区だが、「アルベルゴ・ティフゾ」ができて以来、少しずつ観光客が来るようになった（筆者撮影）

婚して以来、自宅のあるフィレンツェから頻りに訪れていた。電話会社を退職後、本格的にこの集落に住んでいる。棚からワインを持ち出してきたリストーリさんは、上機嫌で町内会活動の自慢を始めた。「道のでこぼこは、大したことなければ自分たちで修繕しているよ。秋にはクリ祭りを主催するんだ。役所に頼んだら『お金がない』って言うからね、頼っていたらいつまでもできないでしょ。わいわいやりながら、自分たちでやってしまうのが楽しいね」。

たどり着いた宿泊部屋は二階にあった。昔からの住居そのままに、廊下や階段は狭く、暖炉や屋根裏部屋もある。ミノツキさんが丁寧に修繕しておかげで、内装は新しくとても快適だが、家具は住民が使っていたものをそのまま使い、壁には絵画も飾られている。友人の家に招かれたようだ。

集落には居酒屋とスーパード喫茶店を兼ねた店が一軒あるだけ。冬になれば雪は一メートル以上積もり、除雪も十分ではない。病院がある町までは約一〇キロ離れている。正直、便利な暮らしとは言い難い。「山なので工場を誘致することもできないし、どうやって集落の消滅を防ぐか、難しい問題だった。しかし、アルベルゴ・ティフゾができて観光客が来るようになり、活気が少しずつ出てきた」とラッジョーロが属するオリタニャオ・ラッジョーロ村のベルサーリ・イバノ村長（四七歳）は喜ぶ。

実際、アルベルゴ・ティフゾの効果は目に見えて出始めている。ラッジョーロで唯一のお店を

営んでいるロザンナ・ガンビーニさん（五五歳）は「この四〇年間、ずっと寂しい時代が続いたけど、最近は夏になると、一五〇〇人ぐらいが来るのよ。昔住んでいた人とか、観光の人とか。外国からも来るわね。アルベルゴ・ティフゾができたおかげで、少しずつ明るさが出てきたの」。土地の値段も、少しずつ上昇に転じてきた。町内会会長のアデリオ・ガンビーニさん（六六歳）は「仕事がないから泣く泣くこの集落を出て行く人が多いんだけど、本当はここに住んでいたい人は多いんだ。アルベルゴ・ティフゾでにぎわいが出てきたから、かつて住んでいた人たちの子や孫が、休暇中の別荘のように使うようになってきた」と話した。

最近、三家族が移住してきた。その一人、アレッシオ・パンティネリさん（三六歳）は三年前、フィレンツェのワイン会社を辞めてワイン醸造家として独立。妻スージーさん（三六歳）の実家がかつてあったラッジョーロに、家族で引っ越してきた。「観光客が来るようになって、にぎわいが出てきたね。食堂では地元食材を使ったおいしい料理が食べられるし、アルベルゴ・ティフゾがなかったら、引っ越してこなかったと思うよ。その上で、こう続けた。「忙しくて家族と一緒の時間さえ持てない会社人生を選ぶか、収入は減っても家族との穏やかな暮らしを選ぶか。私は家族との生活を優先することにしたんだ。そして今、ここに住むことができ最高に幸せだよ」。

へしこた とおる